

『花嫁たちを奪い返せ！』

著：森本あき

ill：タカツキノボル

「天王兄ちゃん、なに考えてんの？」

地王が、天王をのぞき込んだ。突然のことに、おわっ、とのけぞりそうになるが、どうか平静を保つ。

いや、おまえが明るく素直に育ってくれて、兄ちゃんは嬉しいって考えてたんだよ。

そんなことをしみじみ言おうものなら、今度は天王が病人にされるだろう。

だから、黙って、心に秘めておく。

「すごい悪い顔してた。あ、わかった！ 犯人の目星がついたんでしょ」

地王が、目をきらきらと輝かせた。

「天王兄ちゃんなら、解決してくれると思ってた」

「…は？」

天王は、地王を見返す。

「おまえ、なに言ってんだ？ だって、犯人は…」

公彦を見て、ああ、そうか、と、ようやく理解した。

公彦が、そんなことをするわけがない。病気で弱っていて、悪だくみすらできなかっただろう。

だれかに頼めば。

ふと、そう思ったが、天王は即座に否定する。

こんなおもしろそうなことを、他人に託すような性格をしていない。

ということは、公彦じゃない。

それに気づいた瞬間、ぞわぞわぞわ、と全身が総(そう)毛(け)だった。

「…だれだ」

天王は、呆(ぼう)然(ぜん)とつぶやく。

公彦だとばかり思っていた。だけど、ちがう。そうじゃない。

西園寺家のだれか、なのだろうか。

天王は、頭をフル回転させる。

椿たちのことは、別に隠してはいない。ただ、地王を守り抜いたように、椿たちも守りとおせると思っていた。

いや、確信していた。

だって、地王を守ろうとしたときよりも、自分たちは、はるかに強く、賢くなった。次期当主と目されている二人に、わざわざケンカを売るようなバカは、何人かしかいない。

天王が最初に掃除をしようとしているリストに名前があるのは、十人弱。

当然、ずっと監視している。椿たちに何かしようとしたら、その場で止めるように指示も出してある。

それに、当主が正式に引退を発表したわけでもないし、動き出すには早すぎる。切り札を使うのは、後継者争いが本格的になってからだ。

そのぐらいの頭は、敵にだってあるだろう。

「どうした」

公彦が、不審そうに聞いてきた。

「じいちゃんさあ、柚たちをさらいそうな人に心当たりない？」

地王が、あつけらかんと言う。

「ちよっ…」

「バカッ！」

天王と海王が止めたのは、同時。だけど、遅かった。公彦の目が、らんらんと光っている。

「なんだ、あいつら、またさらわれたのか」

「たぶんね。連絡とれないから」

「地王、黙れっ！」

天王は叫んだ。

冗談じゃない。これ以上、ことをややこしくしてたまるものか！

「えー、だってさ」

地王は、唇をとがらせる。

「天王兄ちゃん、わかったのかと思ったら、わかってないし。てことは、心当たりがないんでしょ」

地王の言葉に、反論ができない。

たしかに、これだ、という人間が一人も思い浮かばない。

「だったら、じいちゃんに聞いたほうが早いよ。腐っても、もと当主なんだから」

「おい」

公彦が顔をしかめた。

「腐ってないぞ」

「そういう言い回しだって。気にしないの、そんなこと」

地王はにこにこしながら、公彦の肩を、パンパン、とたたく。

「どう？ これ聞いて、元気になった？」

「そうだな。ちょっと活動してみるか、というぐらいには、元気になった。天王」

公彦に話しかけられて、天王は、しゅしゅ答える。

「なんだ」

「おまえに、心当たりはないんだな」

地王とおなじことを聞いていても、質問の意図はちがう。

おまえが見張ってるやつらは、動いてないんだな？

そういうことだ。

「ない」

すべて、お見通し。

それが悔しくないわけじゃないけど。起き上がるのもめんどろそうだった病人から、完全じゃないとはいえ復活しかけていることは、素直に嬉しい。

だって、まだまだ死んでもらったら困る。自分と海王が、天下を取るところを見てもらわないと。

そんで、悔しさのあまり、歯ぎしりでもしやがれ！

「よし、それじゃあ」

公彦は、よいしょ、と言いながら、起き上がった。

「ちょっくら、ステーキでも食うか」  
「いやいや、じいちゃん」  
地王が、ぶんぶん、と手を振る。  
「今朝まで点滴してた人が、急にステーキ食べたら、またおなかこわすよ。素直におかゆでも食べてなさい」  
「おまえは、医者か」  
「ちがうけど、常識で考えようよ」  
地王があきれれる。  
「よし、じゃあ、常識とわし、どっちが強いかな試そう。もし、これでまた胃をやられたら、素直に地王の言うことを聞いてやる。ただし、わしが勝ったら」  
公彦は、にやりと笑った。  
「この件は、わしの主導でやらせてもらう。いいな」  
公彦は、天王を見る。天王は、肩をすくめた。  
「いいぞ」  
「ちょっ、天王兄さん！」  
海王が止めようとするのを、天王は制した。  
「じいさんにまかせる」  
もちろん、そんなつもりはまるでない。ただ、思い知らせてやりたいだけだ。  
何日寝込んでいたか知らないけど、ずっと点滴生活なら、ステーキなんて、絶対に受けつけない。頑(がん)健(けん)にふるまってみても、すでに、年老いていることを自覚してほしかった。  
無茶はしない。体を大切にする。  
あとは、もうそれだけでいい。  
「よし、ステーキ持ってこい。どーんと三百グラム。それも、レアだ」

本文 p77～83 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>